

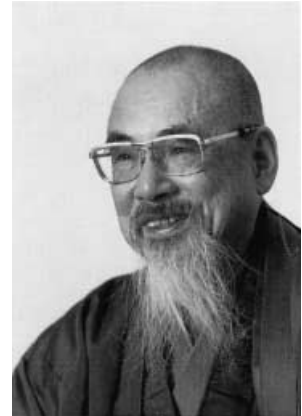
FAITH

仏道と医道

—仏陀は大医王と呼ばれた—

埼玉医大名誉教授・花園大学教授・禅僧 秋月 龍珉

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。



仏教は、文字通りにいうと、“仏陀の説かれた教え”の意である。ここで仏陀とは、歴史的な仏教の開祖釈迦牟尼のことである。しかし仏教は時間的に初期仏教・小乗仏教・大乘仏教と展開し、地域的にもインド・西域・中国・朝鮮・日本・チベット・ベトナム・東南アジアと広い範囲で現に生きていて、一口に八万四千の法門といわれるように、広汎かつ膨大な教説をもっている。

その中で、根本仏教、なかんずく、仏が黄金の口からみずから親しく説かれた教えは何か、ということになると、ただ歴史的・文献学的なことだけに限らず、仏法の宗旨の上からの考察がぜひ必要で、なかなか大変な問題になる。しかしそれはかのベナレス(鹿の苑の地)で、仏陀がかつて苦行を共にした旧友・五比丘に最初に説かれたという「四諦・十二因縁・八正道」といわれる「初転法輪」の説がそれだとするのが、南北東西のすべての仏教を通じての伝承(アノガマ)であるというのが、斯界の通説であるといつてよい。

釈尊は、そこでまず「中道」の説を説かれたという。それは快樂主義と苦行主義の二辺の極端を離れた中庸の道(「中道」は足して二で割る意でなく、また あた的に中る意)すなわち正見・正思唯・正語・正行・正命(正しい生活)正精進(正しい努力)正念(正しい憶念)・正定(正しい身心の統一・安定)である。釈尊はその上で「四諦」(四つの真理)を説かれた。「苦諦・集諦・滅諦・道諦」である。第一の真理は“人生は苦だ”という認識である。そしてそれを具体的に生・老・病・死の四苦と、怨憎会苦・愛別離苦・求不得苦・五蘊盛苦という四苦を併せて八苦という。そうしてその人生苦の原因を探ったのが第二の“集諦”である。

この第二の集諦に仏陀独自の考え方がある。これがいわゆる「因縁生起」、すなわち「縁起」とか「縁生」とかいわれる仏教特有の考え方である。釈尊は人生苦の原因を「神(ないしは神々)の支配」に見なかった。かといって偶然とも運命(宿命)とも見なかった。「自業自得」と見た。その意味で無神論者であった。業すなわち過去に犯した“自己の行為”のせいで現在苦しんでいる。現在を正しく生きれば未来は楽しいという「因果の道理」を確信した人であった。「善因楽果—悪因苦果」である。道元のいうように、「因果の道理、歴年として私なし、造悪の者は三惡道に墮ち修善の者は天上界に昇る」である。これは近代の「科学」と同じ原理(因果律)に立っているから、人生苦の解決にいきなり「神」をもち出す、いわゆる中世的宗教よりも現代人には理解しやすいであろう。ただし、仏陀は、「原因—結果」でなく「縁起」と言った。「原因」を「直接原因(因)」と間接条件(縁)」の二つに分けたのである。一個の蓮の実に

も芽を出し花を開き実を結ぶ「因」がある。しかし、それが土中に埋もれたままでは因として果を産むべく働かない。千年間土器とともに地中に眠っていた大蓮の実を地上に取り出して、大賀一郎博士が栽培された。その縁で大賀蓮が花を開き実を結び、その実を入れた最中が都下町田市の銘菓となって、時に私を楽しませてくれる。これが「縁起—縁生」の説である。仏教の考え方はそれである。では、どうしたら苦の滅に至れるか。そこで仏陀は第四の道諦を説かれ、初めに「中道」で説かれた「八正道」を改めて教えられた。しかしインド好みの羅列主義の「八」という数字がうるさい。そこで仏弟子たちは、まもなく「八正道」を「三学」という“仏教徒の行くべき三つの学びの道”とした。



こうして仏陀の教えの眼目は人間が現実を抱えている苦悩をいかに克服するかにあり、そのために苦悩の現実を把握し(苦の知)、その原因を見究めてそれを断ち(苦の断)、苦を滅した涅槃を実現すべく(苦集滅諦の現証)、そしてそれに役立つ道を修める(苦滅道修)ということであった。それ以外のことは仏は何も説かれなかった。それらは自分の任務ではないとされた。このような仏陀のあり方は、病に対する医者(のあり方)に喩えられる。医者が病状を看てその原因をたしかめ、それを除いて病人に健康を回復すべく薬を与え治療をするように、仏陀は人間の精神の医者であった。それゆえ、仏陀はしばしば「大医王」と呼ばれた。また薬師如来のように、それを象徴する仏の存在も説かれている。

世界の医者・看護婦各位、大医王はともあれ中医王・小医王として世の人々を救う光りとして、如来の眼となり手足となつて、一隅を照らされんことを!